

誰もが利用しやすいトイレについて、性の多様性の視点から考える

Accessible Public Restrooms for All Gender

第2部 「オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究会」調査報告

コマニー株式会社 研究開発本部 研究開発課 高橋 未樹子

Mikiko Takahashi, COMANY INC.

株式会社 LIXIL プロジェクト営業部 スペースプランニング G 日野 晶子

Akiko Hino, LIXIL Corporation

金沢大学 人文学類/人間科学系 岩本 健良

Takeyoshi Iwamoto, Kanazawa University

キーワード：トイレ (Restroom)、トランスジェンダー (Transgender)、
性自認 (Gender identity)、LGBT (LGBT)、オフィス (Office)

1. 本稿での報告

本稿では、金沢大学、コマニー、LIXIL の三者にて立ち上げた「オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究会」で2017年に行った調査結果を報告する。調査は「顔見知り同士で利用する」オフィストイレを想定して行ったが、不特定多数が「一期一会的に利用する」公共施設のトイレにも該当することが多く、今後のトイレ計画の参考になれば幸いである。

2. 調査の目的

トランスジェンダーの中には、出生時の性別と自認する性別どちらのトイレを利用するかで悩んだり、どちらも利用しづらいことから多機能トイレなどの性別を問わないトイレを利用したり、更にはそれらも利用しづらいなど、トイレ利用においてストレスを抱える者もいる。特に、顔見知り同士が利用するオフィスのトイレにおいては、性別移行中である、周囲の理解を得られない、自身がトランスジェンダーであることをカミングアウトしないと自認する性別のトイレを利用しづらい、多機能トイレを利用することはカミングアウトに繋がる可能性もあるなど、不特定多数が利用する公共トイレ以上に深刻な課題となっている。

そこで本研究では、より課題が深刻なオフィスのトイレにおいて、トランスジェンダーを含めて誰もが利用しやすいトイレのあり方を見出すことを目的として、インターネット調査やインタビュー調査を行った。

3. 調査方法

3-1. インターネット調査

インターネット調査の概要を図1に示す。調査は、インターネットアンケートモニターに登録された有職者18~59歳を対象に2017年11月に行った。「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査2016年」に基づいた年齢別人口分布でアンケートを配信し、30,000人から日常の勤務状況やトランスジェンダーに対する意識などについて回答を得た。そのうえで、就業状況により抽出したシスジェンダー824人(20~59歳の性年代で均等割付)、トランスジェンダー167人(18歳~59歳)に対し、オフィストイレの利用実態や利用意向、カミングアウト状況などについて調査を行った。なお、トランスジェンダーについては回答者補完のため、SNSなどでも132人から回答を集め、合計299人(FTM:86人、FTX:73人、MTX:54人、MTF:86人)に対して調査を行った。

なお、本研究では第一部に既述の通り、WHOなど複数の国際機関や学会の報告書に沿って、トランスジェンダーを「自身のジェンダーを、出生時に付けられたジェンダーとは異なるものとして認識している人」

と定義している。そこで、質問では「出生時に付けられた性別（男性／女性）」と、「自認する性別（男性／どちらかといえば男性／どちらかといえば女性／女性／Xジェンダー・中性・無性など／わからない・その他／答えたくない）」を尋ね、図2に示す通りシスジェンダーとトランスジェンダーの判別を行った。

STEP1：トランスジェンダーの割合、就業状況や性的マイノリティに対する意識などについての調査

調査種類	モニター調査	オープン調査
調査方法	インターネット調査 調査会社登録モニター(有職者)へ配信	インターネット調査 SNSや複数のLGBT関連団体を通じて実施
調査対象	オフィスで働く18～59歳 (マンションや自宅をオフィスにしている人は除く)	オフィスで働く18歳以上 (マンションや自宅をオフィスにしている人は除く)
実施時期	2017年11月	2017年10月～11月
総回答数	30,000人	215人

就業状況等の条件に該当する人に対し、STEP 2の調査を実施。

STEP 2：トイレの実態や利用意向、カミングアウト状況などについての調査

調査種類	モニター調査	オープン調査
ジェンダー	シスジェンダー トランスジェンダー	トランスジェンダー
有効回答	男女各412人 計824人	167人 132人 計299人 (FTM:86人,FTX:73人,MTX:54人,MTF:86人)

図1：インターネット調査の概要

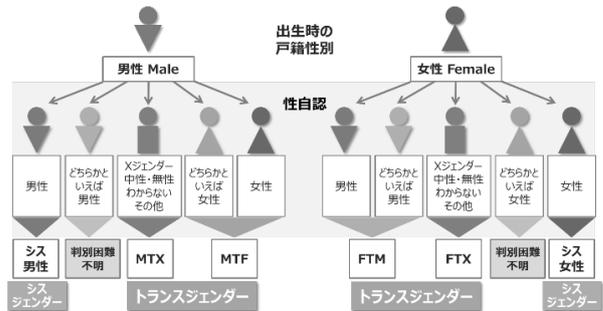


図2：調査におけるジェンダー区分の定義と分類

3-2. インタビュー調査

インタビュー調査は、2017年12月～2018年1月に行った。インターネット調査をもとに、オフィストイレ利用についての意識や多機能トイレの利用状況、男女共用の個室完結型トイレ（以下、男女共用トイレ）の利用意向、トイレのピクトサインに対する意見などをより深く調査することを目的とした。インタビュー調査の回答者は、インターネット調査の回答者の中から就業状況や就業先でのトイレ利用状況などにより、シスジェンダーは男女各5名、トランスジェンダーはFTM、FTX、MTF、MTF各2名を選定した。なお、インタビューは出生時戸籍性別でグループ分けを行い、男性グループ、女性グループ、FTM・FTXグループ、MTF・MTXグループの計4グループで行った。

4. 調査結果

4-1. 回答者におけるトランスジェンダーの割合

有職者3万人（18～59歳）に対して調査を行った結果では、自身のジェンダーを出生時に付けられたジェンダーとは異なるものとして認識しているトランスジェンダーは、全体の2.0%であった（図3）。トランスジェンダーの割合に関する調査は国内外でさまざま行われているが、トランスジェンダーの定義や質問の仕方により、その数値は異なる。本調査の回答者においても性別違和の程度はさまざまで、性自認の区分やトランスジェンダーの捉え方によりその割合は図4のようになる。

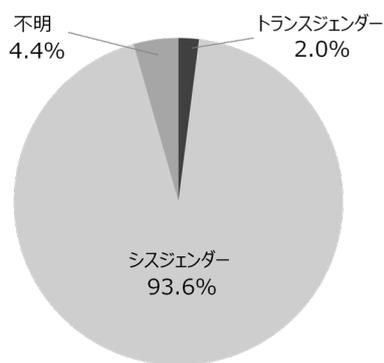


図3：トランスジェンダーの割合

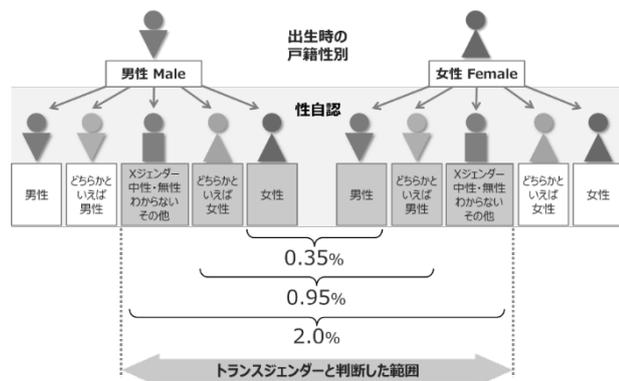


図4：性自認の区分によるトランスジェンダーの割合

4-2. トイレに対する満足度

トランスジェンダーがトイレのどのような点にストレスを感じているのかを調査するため、①トイレに

に対する総合満足度、②トイレの個別要因に対する満足度に関して調査を行った。

① トイレに対する総合満足度

普段利用しているオフィストイレの総合満足度を100点満点で尋ねた結果を表1に示す。シスジェンダー全体の平均は70.4点で、男女での差は見られなかった。一方、トランスジェンダー全体の平均はシスジェンダーより10点近く低い61.2点であった。トランスジェンダーの中でも特に、性自認が男女二元論に当てはまらないFTX、MTXで57点前後と低い総合満足度であった。

表1：オフィストイレの総合満足度

シスジェンダー (n=824)		トランスジェンダー (n=299)		
全体	70.4点	全体	61.2点	
男性	70.0点	トランス 4区分	FTM	64.6点
女性	70.8点		FTX	57.1点
			MTX	56.4点
		MTF	64.3点	

② トイレの個別要因における満足度

シスジェンダーとトランスジェンダーでトイレの総合満足度に差が出た要因を探るため、表2に示すトイレに関する個別要因12項目において、それぞれ±5点で満足度を尋ねた。その結果を図5に示す。全体的にシスジェンダーよりもトランスジェンダーの満足度が低く、特に「環境・心理」に関する項目での差が大きい。中でも、「トイレの選択肢の多さ」に関する満足度が低く、トランスジェンダーの満足度は-0.82とマイナス点であった。この項目においてはシスジェンダーの満足度も低く、0.52点であった。

表2：トイレに関する個別要因

No.	個別要因	
①	清潔さ	設備・機能
②	ニオイ・香り	
③	内装のデザイン (照明も含む)	
④	混雑具合	
⑤	バリアフリー (段差がない、手すりが付いているなど)	
⑥	防犯性	
⑦	付属設備 (温水洗浄便座、パウダーコーナー、荷物置場など) の充実	環境・心理
⑧	サンタリー設備 (生理用品や尿取りパット用ゴミ箱) の有無	
⑨	音のプライバシー確保	
⑩	視線のプライバシー確保	
⑪	落ち着いて利用できる	
⑫	トイレの選択肢の多さ (多機能、男女別、男女共用など)	

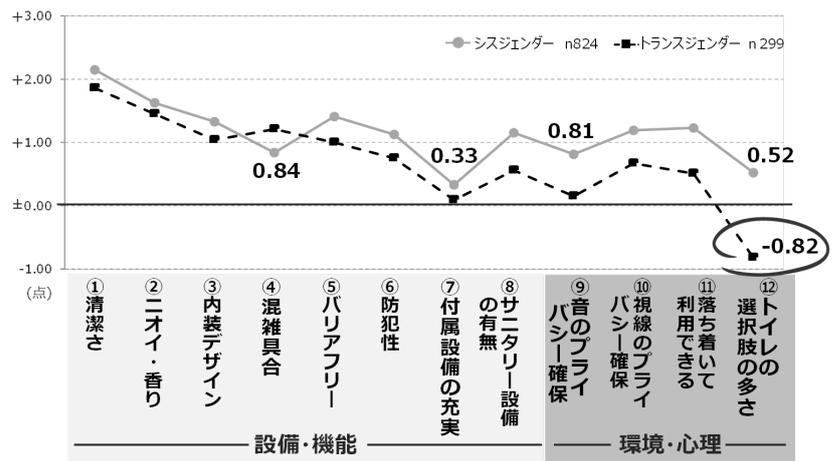


図5：トイレの個別要因における満足度

4-3. 求められるトイレの選択肢

それでは、選択肢としてどのようなトイレが求められるのだろうか。シスジェンダー・トランスジェンダーが利用したいと思っているトイレ（希望）と、実際に利用しているトイレ（実態）の種類を尋ねた結果を図6に示す。シスジェンダーは95.8%が男性または女性トイレを希望しているのに対し、トランスジェンダーでは64.5%であった。トランスジェンダーで多機能トイレを希望する人は17.4%、男女共用トイレは17.7%で、性別を問わないトイレを希望するトランスジェンダーは計3.5割以上で、シスジェンダーより圧倒的に多い。

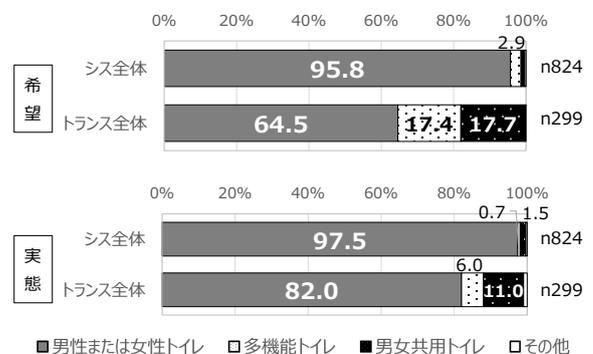


図6：利用したい／利用しているトイレの種類

シスジェンダーは実態においても97.5%が男性または女性トイレと回答し、希望と実態に差は見られなかった。それに対しトランスジェンダーは、男性または女性トイレと回答した人は82.0%で、希望と実態

に 20 ポイント近い差が見られた。実際に多機能トイレを利用している人（実態）は 6.0%、男女共用トイレは 11.0%で、希望より少なかった。

そこで更に、シスジェンダー男女、トランスジェンダーの 4 区分（FTM/FTX/MTX/MTF）における希望と実態のトイレの種類を図 7 に示す。シスジェンダーの場合、希望、実態共に男女それぞれ 95%程度が、自認する性別に沿った男女別のトイレと回答している。一方トランスジェンダーは、ジェンダーによって、更に同じジェンダーでも希望と実態が様々であった。MTF（Male to Female）では、自認する性別である女性トイレを希望する人は 57.0%であるのに対し、実際に女性トイレを利用している人は 37.2%で、希望と実態に 20 ポイント近い差が見られた。また、出生時戸籍性別である男性トイレの利用を希望する人は 19.8%であるのに対し、実際に男性トイレを利用している人は 30 ポイント以上高い 51.2%で、自認する性別のトイレを利用することの難しさがうかがえる。

多機能トイレや男女共用トイレといった性別不問のトイレを希望する人は、シスジェンダー男性をあわせて 5.1%、女性は 2.6%であった。トランスジェンダーはジェンダーによって異なり、FTM は 29.1%、FTX は 42.5%、MTX は 53.7%、MTF は 23.3%で、特に X ジェンダーにおいて性別不問のトイレを希望する傾向が見られた。しかしそれらを実際に利用している人は、FTM は 22.1%、FTX は 13.7%、MTX は 24.1%、MTF は 10.5%で 1~2 割程度にとどまった。今後、オフィスにおいても多機能トイレや男女共用トイレなどの「性別不問のトイレ」の整備が望まれる。

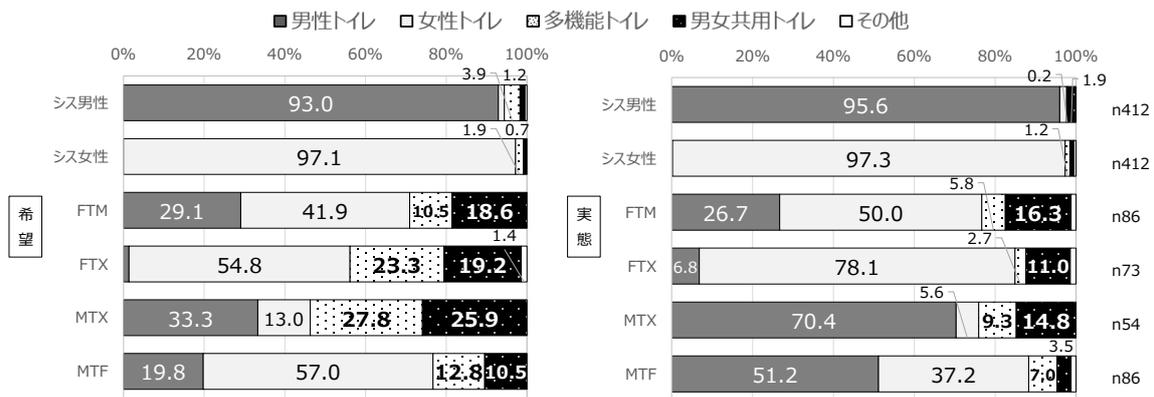


図 7：利用したい／利用しているトイレの種類（シス男／シス女／FTM/FTX/MTX/MTF）

4-4. 男女共用トイレのニーズ

トランスジェンダーには、多機能トイレとは別の「男女共用トイレ」を希望する人も 11.0%いた。その理由を探るため、多機能トイレに対するストレスについて尋ねた結果を図 8 に示す。「そもそも多機能トイレがない」という不満も多いが、「多機能トイレがあっても健常者は利用しづらい」という障害者に配慮した声も、シスジェンダー以上にトランスジェンダーから多く聞かれた。

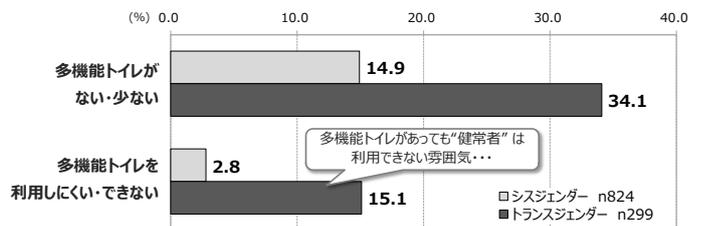


図 8：多機能トイレへのストレス

4-5. みんなが利用する男女共用トイレにするために

トランスジェンダーからニーズがある男女共用トイレも、一部の人しか利用しないトイレになると、そこを利用することがカミングアウトに繋がる可能性があるなどの課題が残る。そこで、シスジェンダー含めてより多くの人利用する男女共用トイレにするための要因を探るため、①男女共用トイレの利用意向、②男女共用トイレを利用したくない理由、③男女共用トイレを利用する条件・状況を、シスジェンダー・トランスジェンダーそれぞれに尋ねた。

① 男女共用トイレの利用意向

主に利用しているオフィスに男女別トイレ以外に、男女共用トイレがあった場合の利用意向を尋ねた結果を図9に示す。設問には、「男女共用トイレは多機能トイレとは異なり、小規模飲食店やコンビニにあるような『男女共用の独立した個室トイレ』との説明を付した。「日常的に利用すると思う（以下“と思う”は略）」と回答したシスジェンダーは8.0%、トランスジェンダーはシスジェンダーよりも20ポイント以上高い31.4%であった。「条件や状況によって」を含めると、シスジェンダーでは57.3%、トランスジェンダーでは77.9%が「利用する」と回答し、全体的に利用意向は高い。しかし、シスジェンダーで34.7%、トランスジェンダーでも16.1%が「利用しない」と回答している。

そこで、ジェンダー別の利用意向を図10に示す。シスジェンダーでは男女差が大きく、「利用しない」と回答した男性は25.7%であるのに対し、女性は20ポイント近く高い43.7%が「利用しない」と回答した。トランスジェンダーにおいても「利用しない」との回答が1~2割程度あり、中でもMTFは22.1%で、FTM・FTX・MTXに比べて利用意向が低い傾向が見られた。

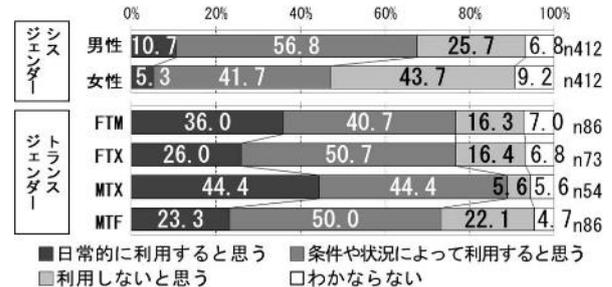
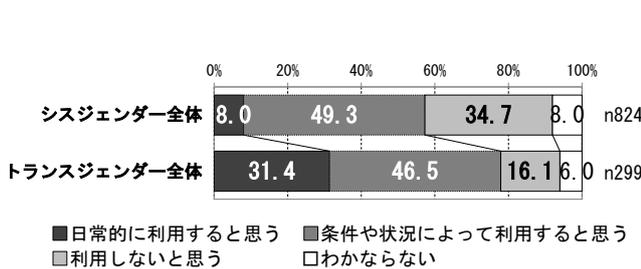


図9: 男女共用トイレの利用意向 (シス/トランス)

図10: 男女共用トイレの利用意向 (ジェンダー別)

② 男女共用トイレを利用したくない理由

より多くの方が利用する男女共用トイレのあり方を探るため、オフィスに男女共用トイレがあっても「利用しない」と回答した人に対し、その理由を17項目複数回答で尋ねた。その結果の上位10位を図11に示す。シスジェンダー・トランスジェンダー共に、「異性と同一トイレを利用することに対する抵抗感」を示す項目が上位を占めた。これは特にシスジェンダー女性に顕著で、「知らない異性と同一トイレを使いたくない」59.4%、「異性の上司や同僚・部下と同一トイレを使いたくない」45.0%に対し、男性はそれぞれ7.5%、8.5%とシスジェンダー男女間で著しい差がみられた。トランスジェンダーでは22.9%が「LGBTなど性的マイノリティではないかと思われそう」と回答しており、シスジェンダーの2.4%と比べても、周囲の目を気にしていることがわかる。なお、その他の理由の自由回答では「自認する性別である女性用トイレを利用するので必要ない」というMTFの回答が目立った。

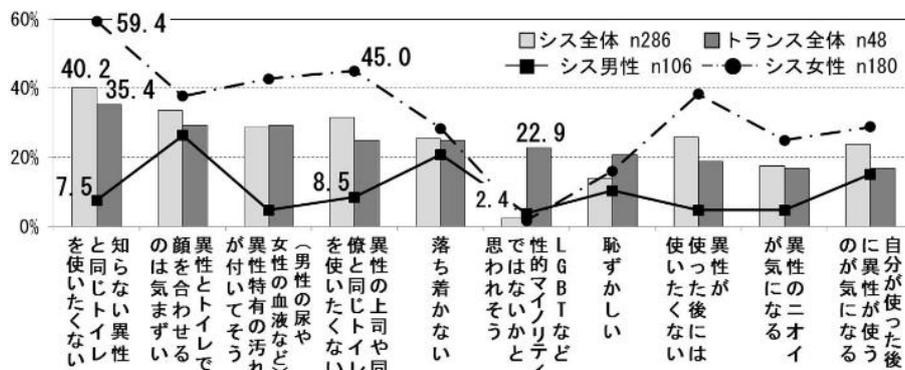


図11: 男女共用トイレを利用しない理由

③ 男女共用トイレを利用する条件・状況

同様に、「条件や状況によって利用する」と回答した人に対し、その条件や状況を20項目複数回答で尋ねた。シスジェンダー・トランスジェンダー共に、「清潔」「待たない」「音やニオイ」や、「我慢できないと

き」「体調が悪いとき」といった項目が上位に挙がった。このような快適なトイレであるための基本条件や、やむを得ない状況を除いた上位 5～6 位を図 12 に示す。シスジェンダーでは「広めの個室である」が 34.2% と圧倒的に多い。この項目はトランスジェンダーにおいても 2 番目に多い 28.1% であった。さらに、「プライバシーが確保されている」「付属設備が充実」などの項目が共通して上位にあがった。一方、「出入りが他人から分かりにくい」といった周囲の目を気にする項目や、「みんなが利用できる」がトランスジェンダー特有の条件としてあがった。トランスジェンダーは、男女共用トイレが“トランスジェンダー用トイレ”となることを懸念していると推察される。

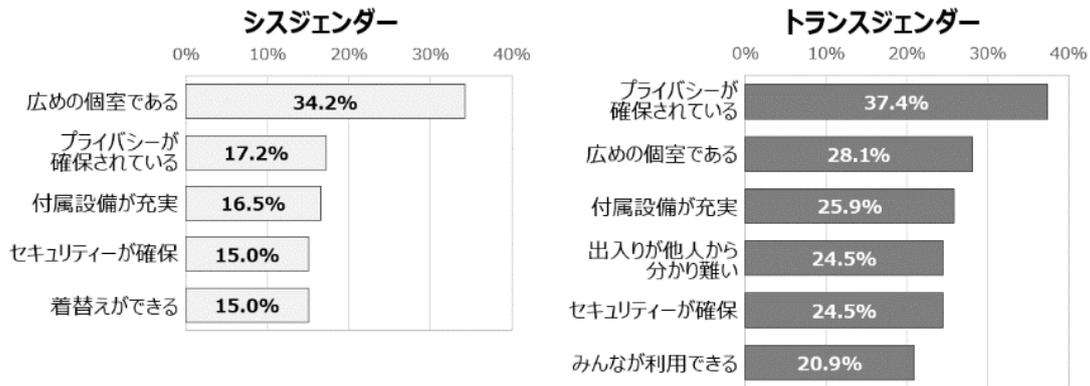


図 12：男女共用トイレを利用する条件

④ より多くの人が利用する男女共用トイレの条件

以上の結果から、より多くの人が利用する男女共用トイレにするためには次の 3 項目が求められる。

- トイレの基本的な要素（清潔、待たない、ニオイなど）を保つこと
- 広めであること。かつ、付属設備が充実していること
- 音や視線などのプライバシーに配慮すること

4-6. 利用しやすい男女共用トイレの配置

さらにより利用しやすい男女共用トイレにするために、その配置についても述べていく。トランスジェンダーが男女共用トイレを利用する条件としてあげた「出入りが他人から分かりにくい」を考慮し、出入りが「A.通路から」「B.男女別トイレの利用者から」、見えるか否かに焦点を当て、図 13 に示す 5 つの配置図を用意し、利用のしやすさについて評価をしてもらった。

配置Ⅰ	配置Ⅱ	配置Ⅲ	配置Ⅳ	配置Ⅴ
A.通路から：見えない B.男女別から：見える	A.通路から：見える B.男女別から：見えない	A.通路から：見える B.男女別から：見える	A.通路から：見える B.男女別から：見えづらい	A.通路から：見える(他フロア) B.男女別から：見えない
トイレ全体への出入口は1ヶ所、各トイレへ枝分かれする配置。 廊下からは、どのトイレに入ったかが分かり難くなっている。	廊下から、各トイレへ出入りする配置。 男女別トイレと男女共用トイレは互いに死角になっており、それぞれの出入りは見えない。	廊下から、各トイレへ出入りする配置。 各トイレは隣接している。	廊下から、各トイレへ出入りする配置。 男性用・女性用トイレは隣接しているが、男女共用トイレは離れた位置にある。	廊下から、各トイレへ出入りする配置。 男性用・女性用トイレと、男女共用トイレは、異なるフロア（階）にある。

図 13：調査を行った男女共用トイレの配置

① 利用しやすさの評価

5 つの配置図を提示したうえで、それぞれを【+5：利用しやすそう⇐-5：利用しにくそう】の 11 段階

で評価してもらった。そのシスジェンダー男女、トランスジェンダーの平均点順位を表3に示す。

表3：利用しやすさ評価の平均点順位

ジェンダー		1位	2位	3位	4位	5位
シス男性	配置	V	I	II	III	IV
	平均点	0.76	0.75	0.56	0.34	0.25
シス女性	配置	I	V	II	III	IV
	平均点	0.92	0.86	0.52	0.32	-0.03
トランス	配置	V	I	II	III	IV
	平均点	0.97	0.82	0.75	0.21	-0.11

1、2位の順序に違いがあるものの、ジェンダーに関わらずほぼ同じ順位で、通路、男女別トイレから共に見える配置Ⅲ、Ⅳの評価が低かった。Ⅳにおいてはシスジェンダー女性、トランスジェンダーでマイナス点となり非常に評価が低い。通路から見え難い配置Ⅰ、Ⅴは、他の配置に比べて比較的评价は高かった。しかし、それでもその平均点は1点にも満たず（最高点5点）、評価が分かれている可能性がある。

② 最も利用しやすい／利用し難い配置

利用しやすさ評価に加え、最も利用しやすそう、利用し難そうと思う配置も尋ねた。そのシスジェンダー男女、トランスジェンダーの結果を図14に示す。

ジェンダーによる大きな差は見られなかった。利用しやすさ評価で点数が高かった配置Ⅰが、「最も利用しやすそう」との回答も4割前後で最も多く、次にⅤを選択した人が多かった。利用しやすさ評価で点数が低かったⅢ、Ⅳは、「最も利用しやすそう」と回答した人も少なく、特にⅣにおいてはシスジェンダー・トランスジェンダー共に5%前後で、最も利用しやすい配置においては評価に明確な差が出た。

一方、「最も利用し難そう」との回答においては、5つの配置に明確な差は見られなかった。Ⅲ、Ⅳは「最も利用しやすそう」と回答した人より「最も利用し難そう」と回答した人が多かった。したがって、男女共用トイレの配置として、出入りが通路からも、男女別トイレからも見えるものは適さないと考えられる。一方、「最も利用しやすそう」との回答が多かったⅠ、Ⅴは、「最も利用し難そう」との回答も多く、評価が分かれた。これが、平均点の低さに繋がっていると考えられる。

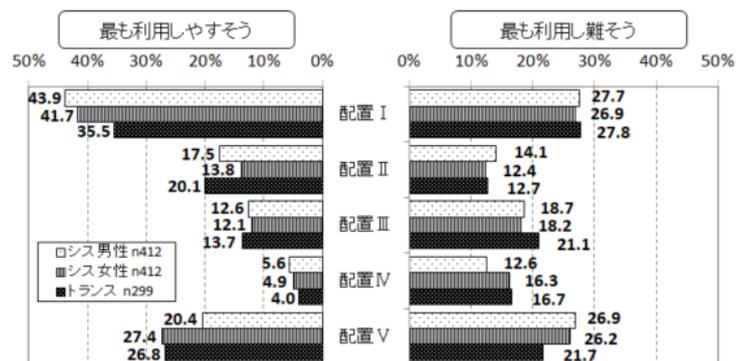


図14：最も利用しやすそう／最も利用し難そうな配

③ 最も利用しやすそう／利用し難そうと評価した理由

男女共用トイレの配置として、出入りが通路からも、男女別トイレからも見える配置Ⅲ、Ⅳは適さないことは分かったが、配置Ⅰ、Ⅱ、Ⅴで評価が分かれた。その要因を探るため、それぞれを評価した理由（記述回答）を、テキストマイニングソフト KH Coder を用いて共起ネットワーク分析を行った。その結果を図15に示す。

配置を評価するうえで、シスジェンダー男女も「目立つ」など人目を気にしているが、特にシス男性においては「近い」といった利便性を重要視していることがうかがえる。トランスは特有語として「見える」「廊下」「共用トイレ」が出現し、廊下と共用トイレの位置関係により評価していることがうかがえる。

さらに、配置Ⅰ、Ⅴにおいて評価が分かれた要因を探るため、評価理由の代表的なものを表4に示す。トランスジェンダーはシスジェンダー以上に「他人の視線」を気にし、トイレに「入る時」「出る時」どちらを重視するかで評価が分かれた。さらにトランスジェンダー特有の理由として、他人と鉢合わせした場合に「言い訳」ができるかでも評価が分かれた。男女共用トイレを利用する「言い訳」の要素として、その4-5③④で述べた「広めであること」「付属設備の充実」は有効と考えられる。なお、フロアが分かれる配置Ⅴにおいては、オフィス環境（他のフロアは他社など）によっても評価が分かれた。

以上から、誰もが利用しやすい男女共用トイレの配置には、次の3項目が求められる。

- 出入りが他の人（廊下や男女別トイレ）から目立たないこと
- さりげなく利用できること
- 利用する言い訳ができること

ただしこれらを全て実現することは難しく、オフィス規模や環境に応じて必要なポイントを選択した配置とすることが重要である。

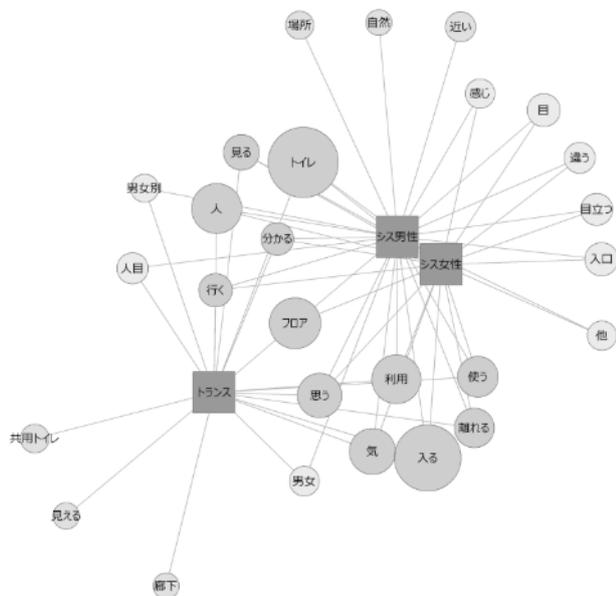


図 15：評価理由の共起ネットワーク図

表 4：配置 I・V の主な評価理由

配置	利用しやすそう	シス	・男女別が混んでいるときに利用しやすそう。 ・どこに入っても違和感がない。
		トランス	・廊下からはどのトイレに入ったか分からない。 ・出るときに鉢合わせしても「男女別が混んでいたから」と言い訳ができる。 ・男女別が混んでいた場合にシスも利用する。 (=特別なトイレではなくなる)
配置 I	利用し難そう	シス	・出るときに他の人と鉢合わせをしそう。
	トランス		
配置 V	利用しやすそう	シス	・他人の視線が気にならない。 ・該当フロアには男女共用しかないなので、そこを利用することが自然。
		トランス	・同僚と鉢合わせすることが少なそう。 ・「たまたま使ったところが男女共用だった」と言い訳しやすい。
	利用し難そう	シス	・他のフロアに移動するのは面倒。 ・他のフロアは他社のフロアで利用できない。
		トランス	・他のフロアに移動するのは面倒。 ・他のフロアを利用する言い訳ができない。

4-7. 男女共用トイレのピクトサイン

近年、多機能トイレや男女共用トイレに、図 16 に示すような性的マイノリティのシンボルである 6 色の虹マークや、男女半々のピクトサインを掲示する事例を見かける。そこで、これらのピクトグラムに対する意識についてヒアリング調査を行った。その主なトランスジェンダーの声を表 5 に紹介する。賛否両論様々な意見があるものの、特別なサインに利用しづらさや不快感を示すトランスジェンダーも多い。「どなたでもご利用ください」「だれでもトイレ」など、障害者や子ども連れに限らず「誰でも利用できること」が明記されていると利用しやすいという声が多かった。

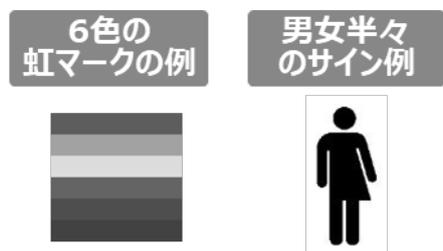


図 16：虹マーク、男女半々ピクト

表 5：虹マーク、男女半々ピクトに対する意見

賛成意見	反対意見
<ul style="list-style-type: none"> ・ あった方が利用しやすい。 ・ 特にこだわらない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「性的マイノリティに配慮しています」と前面に出されると、逆に利用しにくい。 ・ 目立つようについていると入りにくい。 ・ LGBTと一括りにされたくない。(6色の虹がLGBTを象徴するものとして使われるため) ・ 特別なものは不要。 ・ トランスジェンダーは男女半々ではないので、男女半々サインは不快。

4-8. シスジェンダーのトランスジェンダーに対する意識と偏見

4-3で、シスジェンダー・トランスジェンダーが利用したいと思っているトイレ（希望）と、実際に利用しているトイレ（実態）の種類を尋ねた結果を紹介したが、シスジェンダーは希望と実態で差異が見られなかったのに対し、トランスジェンダーでは希望と実態に差異が見られた。そこで、シスジェンダー・トランスジェンダーそれぞれの希望と実態の一致度を図 17 に示す。シスジェンダーは 95.4%が希望と実態が一致しているのに対し、トランスジェンダーは 61.2%と低い。不一致の理由をアンケート調査の自由回答から確認すると、「自認する性別である女性トイレを利用したいが、嫌がる人がある (MTF)」「自認す

る性別である男性トイレを利用したいが、戸籍に基づき女性トイレを利用するように会社から言われている（FTM）」といった、周りのシスジェンダーの対応が影響している声があがった。

そこで、トランスジェンダーが自認する性別のトイレを利用することに対してどの程度抵抗を感じているのかをシスジェンダーに尋ねた。その結果を図 18 に示す。シスジェンダーの多くは抵抗を感じていないものの、男女ともに3割程度が抵抗を感じていた。ただ、その理由を尋ねると、「なんとなく」「理解できない」「トランスジェンダーが身近にいないので接し方がわからない」といった声が多かった。ジェンダーが多様であることを知らない、トランスジェンダーのことを知らない、などから抵抗を感じる人が少なくないと考えられる。

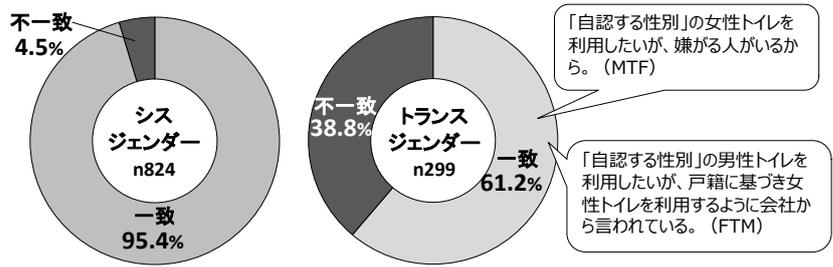


図 17：トイレ利用の希望と実態の一致度

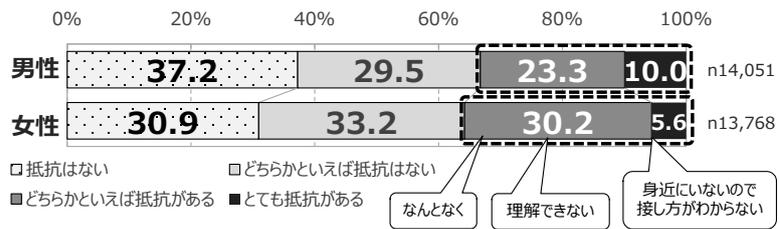


図 18：トランスジェンダーが「自認する性別」のトイレを利用することへのシスジェンダーの抵抗感

4-9. 教育の重要性

それでは、どうすれば「知らないことからくる抵抗感」を減らすことができるのだろうか。まずは、教育が大切だと考える。最近では性的マイノリティに関する教育を行う企業も増えてきた。そこで、トランスジェンダーのトイレ利用に対する抵抗感を、勉強会や研修を実施している企業に勤めているシスジェンダーと、していない企業に勤めているシスジェンダーに尋ねた。その結果を図 19 に示す。なお、回答者が勉強会や研修を実際に受講しているかは不明である。勉強会を実施していない企業に勤める場合は、トランスジェンダーが自認するトイレを利用することに対して「抵抗はない」との回答が 26.8%であるのに対し、実施している場合は 38.6%と 10 ポイント以上伸びる。

次に、トランスジェンダーが身近にいるか否かにおいても同様に調査を行った。その結果を図 20 に示す。身近にトランスジェンダーがいる場合の方が、「抵抗はない」との回答が 20 ポイント以上高く 53.6%であった。教育を通してお互いのことを知ること、場合によってはトランスジェンダー当事者による教育も、「知らないことからくる抵抗感」を減らすことに繋がるのではないだろうか。



図 19：シスジェンダーの意識（企業での研

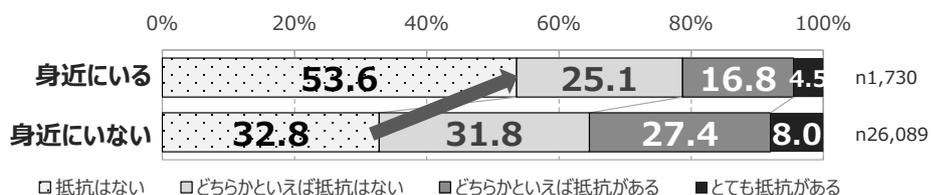


図 20：シスジェンダーの意識（身近なトランスジェンダーの存在）

5. まとめ

以上、「オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究会」の調査結果をまとめると、トランスジェンダーを含めて誰もが利用しやすいトイレにするために、次の2項目が重要だと考える。

●選択できるトイレの種類があり、かつ利用しやすい環境であること

トランスジェンダーが利用したいトイレは、性別違和の程度や性別違和への対応状況、カミングアウト状況などにより様々で、「トランスジェンダー」と一括りにすることはできない。よって、男性トイレ/女性トイレに加え、多機能トイレや男女共用トイレなどの性別を問わないトイレも必要である。

バリアフリー法の義務対象ではないオフィスにおいては、まずは多機能トイレを設置すること。それにより、トランスジェンダーだけでなく車いす利用者などその他の人にとっても利用しやすいトイレ環境の実現に近づけることができる。さらに可能であれば、多機能トイレに加えて男女共用トイレも設置することも推奨したい。そして、バリアフリー法の義務対象である公共トイレにおいては、新たに男女共用トイレを設置することを推奨する。その男女共用トイレに関しては、男性トイレ/女性トイレの個室ブースより広めとして付属設備を充実させることで、より多くの人利用しやすいトイレにすることが重要である。また、利用することが不自然にならない配置にすることなどが求められる。

●知識がないことからくる「偏見」をなくすこと

調査から、自認する性別のトイレを利用することの難しさが明らかになった。ただこの難しさの要因には、シスジェンダーの意識、特に知識がないことからくる偏見が大きく影響していることがうかがえる。この偏見をなくすためには、まずは知ること。これは、トランスジェンダーや障害者などマイノリティに対してだけでなく、全ての人においてお互いに重要なことだと考えている。知らずに偏見をもつのではなくお互いを知ること、そして一緒に考えていくことがインクルーシブな社会の実現に繋がるのではないだろうか。そのためには、学校や職場での教育も重要である。

最後に、研究会からのメッセージをお伝えして締めくくりたい。

「ひとりでも多くの方が、トイレで悩まないように。利用者一人ひとりの性自認とプライバシーが尊重され、利用者の意思に沿う選択肢があること。利用者寄り添った『個別対応』も重要である。設備などのハードを整備するだけでなく、研修等の教育により偏見をなくし、すべての人が、正しい知識とダイバーシティ&インクルージョンの視点を持つことが大切である。」

数年後には、ジェンダーの多様性が広く受け入れられる社会となり、今回述べたトイレ問題が過去のものになっていることを願っている。

謝辞

最後に、本研究の調査にご協力いただきました皆様に深く感謝を申し上げます。

参考文献：

1. 金沢大学、コマニー、LIXIL：オフィストイレのオールジェンダー利用に関する意識調査報告書（公開用資料），2019.5（http://iwamoto.w3.kanazawa-u.ac.jp/Report_on_Office_Restrooms_for_All_Gender_Use_all.pdf）
2. 高橋未樹子、日野晶子、岩本健良他：オフィストイレのオールジェンダー利用に関する研究 その1～6，日本建築学会大会学術講演梗概集，2018～2020